

# プラマーナ・ヴールティカ為自比量章の順位

長崎法潤

## 一

佛教唯識派の学僧にしてディグナーガ (Dignaga, Dī-  
gnāga 陳那) の孫弟子になるダルマキールティ (Dha-  
rmakīrti 法称 六五〇頃) は、最も偉大なる佛教論理学  
者の一人であり、インド及びチベットでは佛教を代表す  
る学僧と考えられていた。かれは七論を著し、そのうち  
プラマーナ・ヴールティカ *Pramāṇavārttika* が主著と  
されている。

一般にインドの論理学書は、最初に認識一般を問題と  
して提起し、認識作用の基本としての現量を論じ、次に  
推理、論証を問題とする。ところがプラマーナ・ヴール  
ティカは、次のような全く異例な順位によって構成され  
ている。

第一章<sup>①</sup> 為自比量 (svārthanumāna)

第二章 量成就 (pramāṇasiddhi)

第三章 現量 (pratyakṣa)

第四章 為他比量 (parārthanumāna)

ところでプラマーナ・ヴールティカは、ディグナーガ  
のプラマーナ・サムッチャヤ *Pramāṇasamuccaya* に基  
き、その説を敷衍していると云われているが、後者は、

第一章 現量

第二章 為自比量

第三章 為他比量

第四章 観喩似喩

第五章 観離

第六章 観過類

なる第六章からなり、ここに当然プラマーナ・ヴールティ

カの異例な章の順位が問題となる。古来この異例な順位について注意が向けられ、註釈家にとって難問題とされてきた。Devendrābuddhi とか Saḥyamati などの註釈家は異例の順位を認めているが、Manorathanandin はその順位に従わず、

第一章 量成就

第二章 現量

第三章 為自比量

第四章 為他比量

なる伝統的な順位に変えて註釈を加えている。<sup>②</sup>

さらにもう一つの問題は、プラマーナ・ブールティカ為自比量章にのみダルマキールティ自身による自註 (svavitti) が附されていることである。かれの弟子 Devendrābuddhi は、自註の附された第一章為自比量を除き、他の第二、第三、第四章に註釈を書いている。従って、第一章に自註が加えられていることも、異例な章の順位と深い関係があるようである。

プラマーナ・ブールティカにおけるこのような異例な章の順位に関しては、西洋及びインドの学者によってすでに詳しく研究されている。とくに E. Frauwallner 博士はこれを問題とした論文を発表し、為自比量章はもと

もと独立した著作であったという説を発表している。さらに近年出版された為自比量章の梵文テキストの校訂者もこの問題について論じている。従って、この問題に關してはすでに詳しく論じられ、それらにつけ加えるものも殆んどないが、この小稿では、従来発表された先学の研究成果を整理し、筆者の意見を若干述べてみたい。

註① paricheḍa は品(一章)であるが、この論文では章を用いることにする。

② Pramāṇavārttika with a commentary by Manorathanandin ed. by R. Saṅkītyāyana, Appendix to JBORS vol. XXIV, Part III, 1938 seq. (以下Mなる略語を用いる。) Jina も伝統的な順位に従っているが、為自比量に対して註釈を加えていない。

## 二

Th. Stcherbatsky 博士の意見——

Th. Stcherbatsky はかれの Buddhist Logic vol. I (pp. 38-39) においてプラマーナ・ブールティカの章の順位に関して次の如く論じている。まずかれは、ダルマキールティは第一章為自比量にのみ自ら註釈を書き、他の章に註釈を書くことを弟子の Devendrābuddhi に委ねたが、なかなか師の満足する註釈が書かれず、三度目

に師が、Devendrabbuddhiによってテキストの全ての意味は明らかにされていないけれども、表面的な意味は正しく伝えられていると述べたというターラナータが伝える伝説を引用している。続いて Nyayabindu と Pramanaviniścaya とにおける各章の順位に比較し、プラマーナ・ブールティカの章の異例なることを記し、最後に A. Vostrikov の報告によって述べている。すなわち、ダルマキールティの直接の弟子 Devendrabbuddhi は異例の順位を認めている。ダルマキールティが為自比量章にのみ註釈を附したが、第一章から書き始め、他の章に対する註釈を書く前に死亡したのである。さらに、佛陀論に関する方法論においてダルマキールティにとって変化があり、そのために第一章に註釈を書くことをせず、現量章の註釈は Devendrabbuddhi に委ね、最も難解な為自比量章にのみ自ら註釈を加えた。

A. Vostrikov の報告には二つの意見が存する。第一は、ダルマキールティは異例の順位によってプラマーナ・ブールティカを書き、第一章にのみ自註を附した。第二は、プラマーナ・ブールティカの本領は伝統的な順位によっていたが、ダルマキールティが為自比量章にのみ自註を加えたので、章の順位が歪められた。なおこれに

関し、ダルマキールティ自身が歪めたのか、弟子によって歪められる結果になったのか明らかにされていない。

#### R. Saṅkītyāyana 師の意見<sup>①</sup>——

R. Saṅkītyāyana によれば、多くのサンスクリット・マニースクリプト及びチベット本に見出される異例な章の順位は、ダルマキールティ自身によるものではありえない。ダルマキールティはもちろん伝統的な順位によってプラマーナ・ブールティカを著し、後に為自比量章のみを自分で註釈した。そこで Devendrabbuddhi や Prajñākaragupta など初期の註釈家は、その章を避けて残りの三章に註釈を加えた。そのために註釈家の師に対する敬意から為自比量章が他から遊離して第一章に置かれ、後に偈頌のみを排列する場合にもその方法に従う慣例になった。

#### E. Frauwallner 博士の意見<sup>②</sup>——

E. Frauwallner は次のような理由を指摘することによって、プラマーナ・ブールティカ第一章は独立の著作であったとする。

(a) 第一章は、その構想において、他の三章と根本的な

相違がある。すなわち、プラマーナ・グールティカは、

ディグナーガのプラマーナ・サムッチャヤに対する註釈として書かれたが、第一章は別として他の章は明瞭にプラマーナ・サムッチャヤとの関係において論じられている。その意味で正式のグールティカである。第二章量成就ではディグナーガがプラマーナ・サムッチャヤの第一偈に与えている佛の称号 (pramāṇabhūtaḥ, jagaddhītaḥ, śāstā, sugataḥ, taty) に基きながら論じている。<sup>③</sup> 第三章はプラマーナ・サムッチャヤ第一章の構想に一致し、ディグナーガの現量説を一つ一つ説いている。<sup>④</sup> 第四章はプラマーナ・サムッチャヤ第三章為他比量の構成と一致する。プラマーナ・グールティカ第二、三、四章がもつプラマーナ・サムッチャヤに対する註釈としての基本的な関係は、Devendrabuddhi, Prajñakaragupta, Manorathanandin などの註釈家によっても当然考慮に入れられている。

(b) それに対してプラマーナ・グールティカ第一章の内容及び表現は全く異っている。表面上プラマーナ・サムッチャヤに関係があるような表現を用いているが、その内容を検討すれば、それはダルマキールティ独自のものであり、プラマーナ・サムッチャヤによっていないこと

が明らかである。

(c) 第一章で論じられている内容は多様で、ディグナーガが論ずるような一つの章から構成されていない。

(d) ディグナーガの著作からの引用もかなり見出され、ただ部分的にはプラマーナ・サムッチャヤの文章に一致するところもあるが、Karnakagomin はむしろ Nyaya-mukha からの引用であると指摘している。

(e) 従って第一章はプラマーナ・サムッチャヤに対する註釈として書かれたのではない。このことは Pramāṇa-viśāyā との対比においても明らかになる。すなわち、プラマーナ・サムッチャヤに対する註釈が当然持たなければならぬプラマーナ・グールティカ第一章の欠点を補おうとしていることが窺われる。

(f) 第一章は因の説に関する一つの独立書であり、プラマーナ・サムッチャヤとは何の関係も考えられない。ただ外面的にプラマーナ・グールティカの他の章と結合したものにはすぎない。

(g) この因に関する独立書には自註も附され、すでに存在していた。プラマーナ・グールティカを書いたとき、為自比量の部分にはこの独立書を用い、第三章に入れず、最初に置いたのである。

# D. Malvaniya 師の意見<sup>⑤</sup>——

プラマーナ・ブールティカ第一章の校訂者 D. Malvaniya は、そのエディションの序文で次のように詳しく論じている。

(a) 為自比量に対するダルマキールティの自註において、量成就章と現量章に説かれている内容を、*vakṣyaṃah* (p. 55) (現量章第三偈を指す)、*vakṣyaṃah* (p. 72) (量成就章の数偈) というように未来形によって言及しているから、ダルマキールティが自註を書いたとき、為自比量が第一章にして、続いて量成就章、現量章が来るべきであるとした。

(b) 自註の最初に、*‘arthanarthavivecanasya anumānāśrayatvat……(artha ṁ anartha ṁ との弁別は比量によるが故に)’* と記している。artha は *Karnakagomin* の註釈<sup>⑥</sup>によれば四諦を証ることであるから、現量より比量の方が重視されている。

(c) 量成就章は正しい量を成就する所以を説くが、それは要するに比量によらなければならないから比量を重視している。従って為自比量に最も重要な位置を与えるために、自註を加えるとき第一章にした。

(d) 自註の最後に *‘pramāṇavārtike prathamah paricheḍah’* とあり、明らかにダルマキールティ自身が第一品(章)と呼び、チベット訳もそうなっている。

(e) *Prajñakaragupta* の註釈によると、量成就が第一章、現量が第二章(ただしチベット訳は第三章)、為他比量では *Ms A* が第三章、*Ms B* が第四章となっている。チベット訳は原本に忠実であるから、チベット訳の章の分け方から考えれば、註釈者は為自比量を第一章であると認めていることが明らかである。為他比量を第三章とする *Ms A* は、註釈の通しの章であって、プラマーナ・ブールティカの章を示していない。それ故 *Manorathanandin* を除き、他の註釈家はみな、ダルマキールティが自註を書くとき変えたように、為自比量を第一章に置いたのである。*Karnakagomin* の註釈(九七頁)において現量章を第三章と呼んでいるから、*Karnakagomin* も為自比量を第一章としている。

(f) 伝統的な順位に従って註釈した *Manorathanandin* は第一章量成就の劈頭に当然帰敬偈を置いているが、ダルマキールティはその帰敬偈を為自比量の冒頭に置き、*Karnakagomin* はその帰敬偈を為自比量の要部であるとしている<sup>⑧</sup>。

だいたい以上の理由により、ダルマキールティが最初ブラマーナ・ブールティカを著したとき伝統的な順位に従ったが、最も重要な為自比量の自註を書いたときに、それを第一章にしたと結論している。

#### R. Gnoli 博士の意見<sup>⑨</sup>——

R. Gnoli は、自分の意見を述べる前に次のように記している。この異例な章の順位に対し、古くからインド及びチベットの論理学者が注意を引くところであった。

Jina (8-9 th?) と Manorathanandin とが伝統的な順位に変えて註釈している。Jina によれば、この歪められた順位はダルマキールティ自身の責任ではなく、あまり利発でない彼の弟子 Devendrabbuddhi のためである。

ダルマキールティは Devendrabbuddhi に第三章(為自比量)ほど難解ではない第一、第二、第四章の註釈を書くように依頼した。このようなことが原因で Devendrabbuddhi が為自比量章を第一章に置き、章の順位を変えた。 Devendrabbuddhi, Karṇakagomin, Sakyamati, Saṅkarānanda 等はダルマキールティに始まる歪められた順位に従っている。このような紹介に続いて、次のような意見を述べている。

(a) ダルマキールティが用いている未来形 [iti vakṣyāmah (p. 84, 1.6) は K によれば第三章第三偈 a、 etad uttaratra vakṣyāmah (p. 105, 1.9) は K によれば第四章第二二三偈 b、二七四偈 a、 vakṣyāmaṇantiya (p. 109, 1.16) は第二章第一四九偈以下、 vakṣyate cātra pratisedhaḥ (p. 132, 1.26) は K によれば第三章第四九三 b] は明らかに他の章を指しているから、章の順位が歪められたのはダルマキールティ自身による。

(b) 量一般、現量は、それを知る主体の側における正しい比量を予想しているから、比量は量成就章、現量章の前に論究されなければならない。換言すれば、為自比量、そして比量一般について論じているこの章は、ダルマキールティによって他の章の序文と考えられた。

(c) これに関連して、自註における劈頭の文章 (arthanāthavivacanasyānumānaśrayatvāt tadvipratipattes tadvyavasthāpanāyāha) は注目に値いする。これに対して Karṇakagomin は次のように註釈している。「もしアーチャールヤ・ダルマキールティがブラマーナ・サムッチャヤを註釈しようとするならば、なぜかれは比量を独立に建立するのであるか。arthanartha 等の語はその疑を否定する。artha は利益であり、anartha は不利益

である。それらを弁別するのは比量による。……（換言すれば）比量によって利益なるものと不利益なるものとを決定して、比量に従い結びついてはたらく知によって「人は」善を得、悪を排除するために特に利益、不利益を建立する<sup>⑩</sup>。」

R. Gnoli は以上によりて、伝統に反した章の順位はダルマキールティによると述べている。ここでは、ダルマキールティが最初プラマーナ・ブールティカを書いたとき、すでにそのような順位によったか否かについては何も言及していないが、初めから為自比量には自註が附され、第一章であったという意見と思われる。そして第一章為自比量を他の章に対する意味の広い序論であると理解している。

註① *Pramāṇavārttikam* by Ācārya Dharmakīrti, ed. by R. Sāṅkṛtyāyana, Appendix to JBORS Vol. XXIV, 1938, Preface pp. iii, iv.

② *Die Reihenfolge und Entstehung der Werke Dharmakīrti's*, Von E. Frauwallner, ASIATICA, Festschrift Friedrich Weller zum 65. Geburtstag, Leipzig, 1954.

③ プラマーナ・ブールティカ量成就章が全くこれによって成ることは Dr. M. Nagatomi も詳しく論じている。

The Framework of the *Pramāṇavārttika*, Book 1, *Journal of the American Oriental Society*, 79/1959, pp. 263-266.

④ 戸崎宏正氏もこの点について論じている。「プラマーナ・サマッチャヤ」と「プラマーナ・ブールティカ」——現量章の構成——（印度学佛教学研究第十卷、第一号）

⑤ *Svārthanumāna-pariccheda* by Dharmakīrti, ed. by D. Malvaniya, *Hindu Vishvavidyalaya Nepal Rajya Sanskrit Series* Vol. II.

⑥ R. Sāṅkṛtyāyana: *Pramāṇavārttika* of Dharmakīrti, *Svārthanumāna-pariccheda*, with the author's *vṛtti* and sub-commentary of Karmakagomin, Allahabad, 1949. (以下Kなる略語を用いる)

⑦ *Pramāṇavārttikabhāṣyam* or *Vārttikāṭaṅkāraḥ* of Prajñākaraṅgupta ed. by R. Sāṅkṛtyāyana, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1953. (以下PKなる略語を用いる)

⑧ Kによれば、論の完成を祈るために論を著す前に帰敬偈を付けるのがインドの著述家の習慣であると述べているが、この帰敬偈が為自比量の要部であるとは記してゐない。

⑨ *The Pramāṇavārttikam* of Dharmakīrti, ed. by R. Gnoli, *Serie Orientale Roma* XXIII, Introduction XV—XVII. (以下Gなる略語を用いる)

⑩ K pp. 4-5.

### 三

以上の意見を総合すれば、大きく三つに分けることができる。

(1) ダルマキールティは従来の伝統に従わず、為自比量に対する特別の配慮または全体に対する序論としての意味から為自比量を第一章とし、続いて第二章量成就、第三章現量、第四章為他比量という独自の構成によってプラマーナ・ブールティカを著作し、その第一章にのみ自註を附した。[R. Gnoli, A. Vostrikov の第一意見]

(2) プラマーナ・ブールティカの本頌を書いたとき、伝統に従って第一章量成就、第二章現量、第三章為自比量、第四章為他比量なる順位であったが、ダルマキールティが為自比量章を重視し、自ら註釈したために、章の順位が歪められる結果になった。(これにはダルマキールティ自身が第一章としたという説と弟子がなしたという意見とがある。[R. Sankityāna, D. Malvaniya, A. Vostrikov の第二の意見])

(3) 最初は何註を附した独立の著作であったが、後にダルマキールティがプラマーナ・ブールティカを書いたとき、第一章としてそれに加えた。[E. Frauwallner の意見]

さて、これらの意見に共通して明瞭なる点は、ダルマキールティの自註が附された為自比量が第一章であるとするところである。このことは、初期の註釈家が認めていること、及び自註において未来形をもって他の章の内容が示されていることによって明らかである。次にダルマキールティ自身によって第一章となされたのか、弟子によってなされたのか、が問題になるが、ダルマキールティ自身によったものであろう。もし弟子によってなされたならば、そのことに關して初期の註釈家は言及するであろう。ダルマキールティ自身によって第一章となされ、動かすことのできないものとなっていたのであろう。また本頌を書いた時、伝統的な章の順位に従っていたか否かについては明らかではない。次に根本的な問題は、為自比量を第一章となした理由であるが、比量を重視し、全体の序論としての意味から第一章となしたという説と独立の著作であったとする意見とに分れている。両意見とも納得できる面もあるが、それだけでは解決できない点も見出される。比量を単に重視することであるならば、プラマーナ・サムツチャヤとの關係において第一章を論じてよいであろう。序論であるならば、為自比量章とすべきではなからう。また独立の著作であったとするな



らば、プラマーナ・サムツチャヤに対する註釈としての意味をもつプラマーナ・ブルティカに加えた理由が明らかにならないし、自註に見出される未来形も問題になる。筆者の結論を明らかにする前に、今迄紹介した資料を多少訂正し、または補足しておきたい。

D. Malvaniya が *Prajñakaraṅga* の註釈における章の分け方について論じているが、R. Saṅkṛtyāyana が記すヴァリアントによったために見落しがある。サンスクリット原典とチベット訳との対照を示せば次のようになる。

(サンスクリット原典)		(チベット訳)	
量成就	第一章	第一章	
現量	第二章	第三章	
為他比量	第三章 (Ms A)	第四章	
	第四章 (Ms B)		

R. Saṅkṛtyāyana が用いたサンスクリット・マニユースクリプトには二種あり、Ms A は *Vibhūticandra* の書写、Ms B は *Danaśīla* によって書写されたものである。A. S. Altekar が記すところによると<sup>①</sup>、両学僧は *Vikramaśīla* 寺院の住職 *Sakyaśrībhadrā* とともに *Kīrtidhvaja* 王に招かれてチベットに入ったと伝えられ

ている。入蔵年代は一二〇四年である。Ms A は紙に書かれ、*Vibhūticandra* がチベットの *Sa-skyā* の一寺院で書写したものである。Ms B は *Danaśīla* がインドで書写したものらしい<sup>②</sup>。従って Ms A の書写は一二〇四年以後、Ms B は一二〇四年以前になるが、両マニユースクリプトはおおよそ一二〇四年を中心にして書写されたものである。

一方チベット訳は、*Skal Idan rgyal po* と *Blo Idan ges rab* との共訳であり、カシュミールにおいて訳出されたとゴンポ史が記す。Blo Idan ges rab は一七歳の時(一〇七五年頃)チベットからカシュミールへ留学し、一七年度の留学期間にこの訳出を行なった<sup>④</sup>。従って一〇七五年から一〇九二年までの間に訳出されたことになり、サンスクリット・マニユースクリプトが書写されるより一〇〇年以前の訳出になる。従って各々のマニユースクリプトに多少の異同があるのは不思議ではない。

まず Ms A が第一、第二、第三と章を分けているのは註釈としての章の分け方である。Ms B は第一、第二、第四となして第三だけを欠いている。これは明らかに第三として為自比量があることを意味する。故にサンスクリット・マニユースクリプトは両者ともに為自比量が第一

章であるとはなしていない。チベット訳は第一、第三、第四となっているが、第一は第二の間違いと考えれば、第一に為自比量が置かれることになるし、第三が第二の間違いとすれば、第三に為自比量を予想したことになりこの点曖昧である。しかしながら、以上の三種のマニュスクリプトが伝える章の分け方を見れば、第一、第二、第三なる註釈独自の分け方 (Ms A)、為自比量を第三に置く伝統的な順位 (Ms B)、及び (チベット訳の第一章を第二章の誤りとすれば) 為自比量を第一に置くダルマキールティ独自の順位とが伝えられていたことになる。もちろんマニュスクリプトにおける章の順位はすべて註釈者 Prajñakaragupta によるものではない。註釈者は恐らく自ら註釈した部分を第一、第二、第三と呼んだかもしれない。ところがブラマナ・グルティカの章の順序に関してすでにインドにおいて意見の相違があったために、マニュスクリプトが読まれ、書写される過程において章の番号の変更がなされたもので、マニュスクリプトは当時における意見の相違を反映していると見るべきである。

ところで Prajñakaragupta 自身、この異例な章の順位に関してどのように考えていたのであろうか。かれの

註釈における為他比量章は次のような文章によって始まる。

‘svārthanumānāntarān parārthanumānamucyate, svarthanumānapūrvakatvātparārthanumānasya.’<sup>⑤</sup>

(為自比量の直後に為他比量が語られる。為他比量にとって為自比量は前に属するものなるが故に。)

この文意は明らかな如く、為自比量は為他比量の前に属するものであるから、為自比量の直後に為他比量が語られるのが順序であるということである。すなわち、かれはむしろ伝統的な順位を支持する態度を示し、実際は為自比量が第一章になっているけれども、本来は為他比量の前にあるべきであるとしている。この態度は異例な章の順位に従わない Manorathanandin においても共通して見られるところである。かれは為自比量を第三章において註釈し、その最初の部分に次のような類似した表現をもって記す。

‘... tatra svarthamidānin vaktavyam etatpūrvakatvāt pararthasya.’<sup>⑥</sup>

(そのうち為自〔比量〕が今説かるべきである。為他〔比量〕にとってそれは前に属するものなるが故に。) このように Manorathanandin は為自比量を第三章と

して註釈する理由を明示しなければならなかったのである。なぜならば、従来伝えられているプラマーナ・グールティカでは為自比量が第一章となっているからである。

Devendrabuddhi, Sakyamati, Karṇakagomin の三註釈家はいずれも七世紀に属し、ほぼ同年代に活躍しており、最もダルマキールティに近かったわけである。かれらは三者とも異例な順位を認めている。それを最初に批判したのが、少し時代がさがる Prajñakaragupta (八世紀)であり、それが Jina (八―九世紀)、Manorathana-ndin (一〇―一三世紀)に受継がれたと見るべきである。

それでは何故にダルマキールティは為自比量にのみ自註を附し、第一章としたのであろうか。E. Frauwallner が指摘したように、第二、第三、第四はプラマーナ・サムツチャヤに対する註釈として書かれているのに対し、第一章はその構想において根本的な相違がある。varttika とは、原文の字句に従って註釈を加える bhāṣya とか tika とは異り、自由に批評を加えるところの註釈である。

プラマーナ・グールティカはプラマーナ・サムツチャヤに対するグールティカであるとするが、第一章はその役割を完全に果しているであろうか。プラマーナ・サムツチャヤの為自比量章とは関係のない問題を第一章では論

じ、グールティカの意味がないのではなからうか。さらにグールティカであるならば、プラマーナ・サムツチャヤの章に従うべきで、為自比量を第一章とすべきではなからう。このような疑問に関し、Karṇakagomin も言及している。R. Gnoli もこの註釈に注目し、すでに第二節で引用したが、問題を明らかにするために再びここに引用することにする。

「もしアーチャールヤ・ダルマキールティがプラマーナ・サムツチャヤを註釈しようとするならば、何故にかれは独立に比量を建立するのであるか。その疑を否定して言う。arthanartha 等である。āttha は利益であり、anartha は不利益である。それらを弁別するのは比量によるからである。……比量によって利益なるものと不利益なるものとを決定して、比量に従い結びついてはたらく知によって「人は」善を得、悪を排除するために特別に利益、不利益を建立する」<sup>⑦</sup>

Karṇakagomin の註釈から次のことが云えるであろう。第一章がプラマーナ・サムツチャヤの為自比量に対する註釈的な意味を持っているとするならば、何故に為自比量はプラマーナ・サムツチャヤとの関係なしに説いているのであろうか、という疑問が当然起りうるが、それは

arthanartha等の語によって否定される。すなわちプラマーナ・サムッチャヤに対する註釈であることを無視しているわけではないが、比量が人間の知的行為にとって特に重要と考えるため、まず為目比量を論するのであるという意趣である。

ダルマキールティは、arthanarthavivecanasyānumānāyātāt<sup>⑧</sup>(利益、不利益の弁別は比量によっているから)に続き、tadvipratipattes tadyavasthapanayāha(それ、すなわち比量に関する意見の相違があるから、それを安立するために曰く)と述べ、第一偈を説いている。すなわち、比量は最も重要視されるばかりでなく、比量に関して意見の相違があるから、まず為自比量を説かざるをえないと考えたのである。

ダルマキールティはディグナーガの学説を踏襲しながら独自の説を展開した。そのうち最も独自の学説の発展は比量、とくに為自比量において見られる。自性因、所作因、不認得因なる学説はディグナーガの為自比量には見られない。さらにアポーハ説に関しても新しい展開がある。ダルマキールティはまず独自の学説をまとめて説くために自註を附した為自比量を著したものと思われる。もちろんプラマーナ・サムッチャヤに対する註釈として

の意味を感じていたけれども、それに拘束されずに書いたものと思われる。

プラマーナ・ブールティカがプラマーナ・サムッチャヤに対する註釈であれば、当然その章に従って註釈しなければならぬ。しかしダルマキールティは、ブールティカの意味を非常に広く考えていたようである。必ずしも章通り註釈する必要もなく、新たに章が必要と認めればそれを立てることをし、章の順位にもこだわらず、自由に註釈を加えるという考えのもとでプラマーナ・ブールティカを書いたのではなからうか。このように考えなければ、プラマーナ・サムッチャヤに基いている点もあるが、一致しない点も多いプラマーナ・ブールティカをブールティカとして名づける根拠が理解できない。特に独自の説を述べようとする場合、註釈ということに拘束されては完全になすことができない。

第一章為自比量はブールティカとして書かれたものであるが、独創説を説くためにプラマーナ・サムッチャヤとの関連が薄くなっていることは事実である。E. Frauwallner は自註における引用はむしろ Nyāyānuśāsa からであり、プラマーナ・サムッチャヤとは無関係であるとする。しかし、プラマーナ・サムッチャヤに部分的に

一致するだけではなく、それからの引用も多く見出される。またプラマーナ・サムッチャヤとの関係が少いのは、主に独創説を論じたからである。しかしながら序論として第一章を書いたのでもなく、むしろ比量を極度に重視し、かれの独創説を論ずるためにまず為自比量を書き、自註を附してその説を明らかにし、第一章とした。

註① PK の序文。

② 稻葉正就教授の御教示による。

③ PK における R. Sankityāyana の序文（サンスクリット文）による。

④ 稻葉正就教授「チベット中世初期における般若中観論書の訳出」（下）（佛教学セミナー第5号）十三—十四頁。

⑤ PK p. 467.

⑥ M p. 282.

⑦ K pp. 4-5.

⑧ G p. 1.